（別紙様式３）　　令和２年３月３１日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　　岡山県岡山市北区内山下２－４－６
管理機関名　岡山県教育委員会
代表者名　　教育長　　鍵本　芳明

令和元年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

１　事業の実施期間
　令和元年５月 30 日（契約締結日）～　令和２年３月 31 日
２　指定校名・類型
　学校名　　岡山県立和気閑谷高等学校
　学校長名　香山　真一
　類型　　地域魅力化型
３　研究開発名
　「恕」の精神を持って地域と協働する探究人の包括的育成
４　研究開発概要
　本構想は、指定校が規定する「地域と協働する探究人」育成を目的とし、卒業までに身につけさせたい資質・能力「７つのチカラ」の向上を目標とする。そのために、（ア）各教科・科目における地域協働カリキュラム、（イ）地域協働デュアルシステムカリキュラム、（ウ）総合的な探究の時間における地域協働カリキュラム、（エ）各教科・科目等と連動する課外活動、（オ）（ア）～（エ）を支援する体制の構築の５点について研究開発する。
５　教育課程の特例の活用の有無　　無
６　管理機関の取組・支援実績
（１）実施日程

業務項目	実施日程										
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コンソーシアム及び各部会											
・魅力化推進協議会／学校運営協議会（コミュニティ・スクール）			○					○		○（中止）	
・小中高接続部会			○				○		○		
・産学官連携部会						○			○		
・高大接続部会				○		○		○			
・企画委員会	←隔週程度で開催→										
県内先進実践校との連携・協力体制の構築							◎（発表会）				
運営指導委員会						○				○	

（２）実績の説明

ア　管理機関による事業の管理方法や地域において構築するコンソーシアムの構成、カリキュラム開発等専門家、海外交流アドバイザー及び地域協働学習実施支援員の配置について

(ｱ) 管理機関による事業の管理方法

a　運営指導委員会について

(a) 運営指導委員会の構成員

氏名	役職
足立　大樹	ベネッセコーポレーション　学校カンパニー　西日本教育支援推進部　中四国支社長
石原　達也	岡山ＮＰＯセンター　代表理事
岡山　一郎	山陽新聞社編集局　編集委員室長
神崎　浩二	岡山県経済団体連絡協議会　事務局長
中村　賢三	岡山県総合政策局　地方創生推進室長
前田　芳男	岡山大学地域総合研究センター　副センター長（教授）

(b) 活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年 10 月４日 （第１回）	第１回会合 ・総合的な探究の時間「閑谷學」の見学 ・本事業の取組内容等について、管理機関及び指定校からの説明 ・取組内容における、委員からの質疑応答及び指導助言 （探究的な学びの取組方法、デュアルシステム　等）
令和２年２月６日 （第２回）	第２回会合 ・生徒による総合的な探究の時間「閑谷學」のプレゼンテーション及び生徒と委員との意見交流 ・本事業の進捗状況及び来年度以降の計画について、管理機関及び指定校からの説明 ・取組内容における、委員からの質疑応答及び指導助言 （総合的な探究の時間における教員の指導方法　等）

(ｲ) 地域において構築するコンソーシアムの構成について

a　コンソーシアムの構成団体

【魅力化推進協議会（コンソーシアム）／学校運営協議会（コミュニティ・スクール）】

機関名	機関の代表者名
＊和気町	町　長・草加　信義
＊和気町教育委員会	教育長・徳永　昭伸
＊和気商工会	会　長・川上　健二
和気金融協議会	会　長・丸児　務（中国銀行和気支店長）
＊赤磐市	市　長・友實　武則
＊赤磐市教育委員会	教育長・内田　惠子
＊赤磐商工会	副会長・中原　哲哉
＊備前市	市　長・田原　隆雄
＊備前市教育委員会	教育長・奥田　泰彦
＊備前商工会議所	会　頭・寺尾　俊郎
＊備前東商工会	会　長・横山　忠彦
NPO 法人 和気サンシュユの会	理事長・定國　誠也
＊特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会	理事長・國友　道一
＊岡山大学	教師教育開発ｾﾝﾀｰ副ｾﾝﾀｰ長・高旗　浩志
＊和気閑谷高等学校	校　長・香山　真一
＊和気閑谷高等学校ＰＴＡ	会　長・大智　りえ
＊和気閑谷高等学校同窓会	会　長・内山　登
岡山県教育委員会	教育長・鍵本　芳明

令和元年１２月２３日、＊の主体を委員として学校運営協議会（ｺﾐｭﾆﾃｨ・ｽｸｰﾙ）へ移行

【小中高接続部会】

所　属　名	委　員　氏　名
和気町立和気中学校	校　長・小林　健
和気町立佐伯中学校	校　長・松井　啓子
赤磐市立赤坂中学校	校　長・的場　豊
赤磐市立吉井中学校	校　長・青山　利明
備前市立三石中学校	校　長・岡部　高弘
備前市立吉永中学校	校　長・木村　俊一
和気町立和気小学校	校　長・徳永　博文

【産学官連携部会】

所　属　名	委　員　氏　名
備前市市長公室企画課	課　長・岩崎　和久
備前市教委教育部文化振興課	課　長・横山　裕昭
備前商工会議所専務理事事務局	事務局長・西角　友彰
備前東商工会支援課	課　長・武田　正幸
赤磐市総合政策部政策推進課	主　査・直原　真弓
赤磐市教委学校教育課	課　長・家森　康彰
赤磐商工会支援課	課　長・竹並　義人
和気町まち経営課	課長補佐・海野　均
和気町教委社会教育課	課　長・則枝日出樹
和気商工会支援課	課長補佐・出射　弘貴
和気金融協議会	会　長・丸児　務
NPO 法人 和気サンシュユの会	理事長・定國　誠也

【高大接続部会】

所　属　名	委　員　氏　名
岡山大学教育学研究科	准教授・宮本　浩治
岡山大学地域総合研究センター	実践型教育プランナー・吉川　幸
岡山商科大学経営学部商学科	教　授・三好　宏
山陽学園大学地域マネジメント学部	学部長・大橋　和正
中国学園大学	副学長・住野　好久

b　活動日程・活動内容

【魅力化推進協議会（コンソーシアム）／学校運営協議会（コミュニティ・スクール）】

活動日程	活動内容
令和元年７月 24 日 (第1回魅力化推進協議会)	コンソーシアムを組織、第１回会合 ・本校と本事業への協力体制　　・地域から期待することについて
令和元年 12 月 23 日 (第1回学校運営協議会)	第２回会合 ・教育課程について　　・教育課程を実現する人事について
令和２年２月 28 日 (第2回学校運営協議会)	第３回会合　※新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止 ・学校関係者評価について　・次年度学校経営計画と予算について

【小中高接続部会】

活動日程	活動内容
令和元年７月９日 （第１回）	第１回会合 ・４つの事業（中高交換留学制度、小中高生サミット、地域協働ベースボールプロジェクト、本校文化祭企画）について
令和元年 11 月６日 （第２回）	第２回会合 ・持続可能な 12 年間のキャリア・パスポートの制度構築について
令和２年１月 22 日 （第３回）	第３回会合 ・中高生サミットとキャリア・パスポートについて

【産学官連携部会】

活動日程	活動内容
令和元年４月 24 日 （第１回）	第１回会合 ・２年次生「閑谷學」での情報提供依頼 ・就労体験実習受入先募集案内　等
令和元年 10 月 17 日 （第２回）	第２回会合 ・就業体験実施報告、学校設定教科・科目「地域協働探究」の内容検討
令和２年１月 29 日 （第３回）	第３回会合 ・学校設定教科・科目「地域協働探究」の内容検討

【高大接続部会】

活動日程	活動内容
令和元年８月８日 （第１回）	第１回会合 ・授業改善と７つのチカラについて
令和元年 10 月７日 （第２回）	第２回会合 ・育成すべき資質・能力とその評価について ・７つのチカラの構造化について
令和元年 12 月５日 （第３回）	第３回会合 ・目指す姿・育成すべき力と長期ルーブリックについて

(ｳ) カリキュラム開発等専門家又は海外交流アドバイザーについて

a　指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

・一般社団法人まなびと代表理事　江森真矢子氏　週２日（計 10 時間）高等学校で勤務

・和気町立和気中学校非常勤講師　梅村竜矢氏　週２日（計８時間）高等学校で勤務

b　活動日程・活動内容

・江森真矢子氏

活動日程	活動内容
令和元年５月 30 日～ 令和２年３月 31 日	新カリキュラムを考える会に出席 ・令和３年度入学生と令和４年度（新課程）入学生のカリキュラム編成について協議 ・新設学校設定教科・科目「地域協働探究」について協議
	小中高接続部会、高大接続部会の運営 ・部会主担当と会議内容について協議　　・議事録作成
	学校運営協議会、運営指導委員会の出席
	総合的な探究（学習）の時間「閑谷學」の授業サポート ・２年次生のテーマ設定に向けて講義 ・２年次生の中間発表の講師 ・１・２年次生の探究学習発表会の企画運営

・梅村竜矢氏

活動日程	活動内容
令和元年８月１日～ 令和２年３月 31 日	新カリキュラムを考える会に出席 ・令和３年度入学生と令和４年度（新課程）入学生のカリキ

	ュラムについて協議 ・新設学校設定教科・科目「地域協働探究」について協議
	長期就業体験実習について企業訪問 ・受入依頼　　・実習プログラムについてヒアリング
	産学官連携部会の出席　・長期就業体験実習について協議 職員会議に出席　・就業体験実習やアルバイトについて協議
	学校運営協議会、運営指導委員会の出席
	総合的な探究（学習）の時間「閑谷學」の授業サポート ・２年次生の中間発表の講師 ・１年次生の授業内容について科目担当者と協議 ・１年次生のフィールドワーク先の調整

(ｴ) 地域協働学習実施支援員について

a　指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

・地域おこし協力隊（本校支援職員）　中村哲也氏（常勤職員として雇用）

b　実施日程・実施内容

日程	内容
令和元年５月 30 日～ 令和２年１月 31 日	３年次団（学年付）・進路指導課所属、英語研究部顧問
	総合的な探究（学習）の時間「閑谷學」の授業サポート ・主に３年次生の「閑谷學」の企画立案、指導 ・３年次生の卒業探究発表会の企画運営
	小中高接続部会の運営 ・部会主担当と会議内容について協議 ・小中学校へのイベント案内送付
	学校運営協議会、運営指導委員会の出席

イ　管理機関による主体的な取組について（コンソーシアムによる取組も含む）

・　地域協働先進校の連絡協議会の実施

和気閑谷高等学校をはじめとした、地域と協働した教育活動を先進的に実施している県内の高等学校 16 校の生徒及び教職員による事例発表等を行う「地域と連携した『高校の魅力化』フォーラム」を令和元年 11 月 14 日に岡山大学にて実施した。本フォーラムでは、事例発表のほか、地域・教育魅力化プラットフォーム共同代表の岩本悠氏による基調講演や、教職員・生徒・コーディネーターに分かれての研修を実施した。教職員研修では、「地域との連携」をテーマに協議を行った。コーディネーター研修には、県が１学年３学級の小規模校に配置しているコーディネーターを中心に、和気閑谷高等学校のカリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員も参加し、岡山大学地域総合研究センターの実践型教育プランナーがファシリテーターとして、コーディネーターの役割や現状の課題及び今後の方策等について協議を行い、コーディネーターの知見の共有及びネットワークの拡大を図った。本フォーラムは、和気閑谷高等学校を含めた地域協働先進校における取組の成果を、県下の高等学校間で共有し普及させることをねらいとすると同時に、地域協働先進校同士の学びの場と位置づけて実施した。

ウ　高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

・和気町職員の岡山県立和気閑谷高等学校における職員支援協定（H26～）

・岡山商科大学と岡山県立和気閑谷高等学校との高大包括連携に関する協定（R1.7～）

エ　事業終了後の自走を見据えた取組について

(ｱ) コミュニティ・スクールの導入

岡山県立学校にコミュニティ・スクールを導入できるよう、令和元年６月に「岡山県立学校における学校運営協議会の設置等に関する規則」を制定し、９月に「岡山県立学校における学校運営協議会の運営等に関する要綱」とともに県立学校へ通知した。県立学校として最初のコミュニティ・スクールを、12 月に和気閑谷高等学校へ導入し、より地域と協働した学校運営が行われる体制を整備した。

(ｲ) 地域協働学習実施支援員の継続（コンソーシアム）

和気閑谷高等学校が所在する和気町との協定により、和気町から派遣された支援職員を地域協働学習実施支援員に指名することで、事業終了後も引き続き高等学校へ配置することが可能となり、学校による地域と協働した探究的な学びを継続することができる。

7　研究開発の実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程										
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
７つのチカラ育成の年間計画	シラバス・単元配列										
・各教科の長期ルーブリック	← 作成 →				← 検証 →						
・３年間の学修ルーブリック	← 作成 →				← 検証 →						
・７つのチカラのルーブリック	← 作成 →				← 検証 →						
学力向上に関する研究協議会		1回					2回		2回		
パフォーマンス課題の実践報告	← 実践 →							← 掲載 →			
１年次生閑谷學											
・年間指導計画の作成と検証	作成 ← 検証 →										
・大学教授から探究手法を学ぶ	1回	2回									
・テーマ設定、町内での実践						設定	← 実践 →				
２年次生閑谷學	← SDGs の達成に向けた探究活動 →										
・年間指導計画の作成と検証	作成 ← 検証 →										
・就業体験実習（５日間×３期）			Ⅰ期							Ⅱ期	Ⅲ期
３年次生閑谷學	← 探究活動 →										
・年間指導計画の作成と検証	作成 ← 検証 →										
探究学習発表会											
・１・２年次生探究学習発表会			○ (中間発表)							○	
・３年次生卒業探究発表会								○			
・３年次生卒業探究論文集						← 作成 →		完成			
本研究開発専用のサイト開設	開設 ← 随時更新 →										
学校設定教科・科目「地域協働探究」	← 検討 →						← 事前協議 →				
近隣高校（全国高校）との探究学習交流			1回			1回	4回	3回	1回	1回	

（2）実績の説明

ア　研究開発の内容や地域課題研究の内容について

(ｱ) コンソーシアム及び各部会

親会議である魅力化推進協議会は 12 月 23 日に学校運営協議会（コミュニティ・スクール）に移行した。各部会では本研究開発の取組を円滑に進めるための実質的な協議を行うことができた。

(ｲ) 各教科・科目

教科のシラバス・年間計画に各教科において育成を目指す７つのチカラを明記した。そして、高大接続部会での協議を踏まえ、各教科で７つのチカラとつながる教科の長期ルーブリック案を完成した。また、本校の生徒として望ましい姿を示した「学校生活を振り返ろうルーブリック（学修ルーブリック）」を作成し、学期ごとに自分の成長を自己評価するために活用した。生徒は iPad や論語手帳を活用して、７月と 12 月の三者懇談で学期ごとの自らの成長を語ることができた。

授業改善については、広島大学の山元隆春教授と岡山大学の髙旗浩志教授に指導・助言をお願いし、学力向上評価委員会を計５回実施した。11 月 16 日の研究授業と１月 16 日の公開授業には全教職員が参加し、お互いの授業を評価し合った。成果物として学ぶ値打ちのある探究的な学習課題を核とした単元を創り、34 の実践報告をホームページに掲載している。

学校設定教科・科目「地域協働探究」のシラバス及び年間指導計画について、校内組織の「新カリキュラムを考える会」等で検討した。令和３年度の３年次生からの運用に備え、産学官連携部会で検討し、部会主担当教員とカリキュラム開発等専門家がインターンシップの事後アンケートや就業体験実習受入希望一覧から企業訪問をして受入側のニーズを探ることにより、評価基準も含めた具体的な実習方法を検討している。

(ｳ) 閑谷學

１年次生閑谷學では、１学期に、包括連携協定を結んだ岡山商科大学経営学部の三好宏教授に探究手法（発想法、アンケート手法、インタビュー手法）を学んだ。２学期からのグループ探究に入る前、和気町の課題を町職員から、「身の回りの小さな困りごと」というタイトルで話題提供をしていただいた。その後、生徒の希望により、５つのゼミに分かれ、さらに４～５名ずつのグループをつくり、10 月 18 日にゼミ別フィールドワークに出かけた。その後、グループでテーマ設定し、町の方へのアンケートやインタビュー等で調査を進めた結果を２月の最終発表会（１・２年次生合同）で iPad を用いて発表した。

２年次生閑谷學では、テーマ設定前に２市１町の担当者等多くの地域の大人（延べ 11 名）から異文化理解、SDGｓ、２市１町の課題、テーマ決めの方法などの話を聞く機会を設けた。７月の中間報告会には大学関係者等 10 名の講師に指導助言をいただくなど、多くのグループが大学や自治体、企業から適宜指導を受け、実践的に活動した。２月の最終発表会でも、中間報告会の講師４名を含む 11 名の大学関係者等に指導助言をいただくとともに、80 名の来客を迎えて１年間の探究成果を発表した。

３年次生閑谷學では、各自の進路分野について現状と理想の差を埋める提案を個人探究で進めた。テーマに応じて、大学や自治体、企業から情報収集し、一人 2000 字の論文にまとめて論文集を作成した。12 月の卒業探究発表会では、77 名の来客を迎え、一人ひとりが個人探究の研究内容についてポスター発表をした。今年度は、閑谷學での探究活動を生かし、国公立大学・短期大学に４名の生徒が合格した。

イ　地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等）

(ｱ) 各教科・科目

７つのチカラを、各教科・科目で共通して身に付けさせたい資質・能力として設定し、これらの資質・能力を具体化した各教科の長期ルーブリックを作成しつつある。今後、長期ルーブリックと

ともに、単元配列表を整えて生徒に明示する予定である。

併せて、合科的・教科横断的なパフォーマンス課題、地元の特長的な教育資源の活用、地元企業と連携した実習や本物に触れる体験を取り入れた単元開発など、社会に開かれたカリキュラム開発を目指し、学ぶ値打ちのある学習課題を核とした単元を創りホームページで公開した。

デュアルシステムカリキュラム開発については、２年次の夏期・冬期・春期に各５日間の就業体験実習を施行している。就職希望者の中から５名が手を挙げ、２年次の夏期・冬期・春期に各５日間の就業体験実習を実施した。（３月実施の一部企業は新型コロナウイルス対策の影響により中止。）

(ｲ) 閑谷學

生徒の探究学習の専門性や新規性を高めるため、探究学習を進めるプロセスにおいて、生徒が大学教授や大学院生等大学関係者、地元企業・自治体の従業員・職員等から適宜指導を受けられる体制の構築を目指した。１年次生は大学教授から探究の手法を学んだ。２年次生を中心に、テーマ決めや中間報告会、最終発表会等で、多くの関係者に指導助言していただいた。また、普段の探究活動においても、外部講師が適宜授業に参加する体制が整いつつある。

ウ　地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

各教科・科目で学んだことを生かす場や総合的な探究（学習）の時間における情報の収集、仮説の実証の場として、地域の大人や小・中学生、留学生、国内外の高校生との交流を積極的に行った。

２年次生の閑谷學では、今年度備前市教育委員会が作成した「論語かるた」を使用した和気中学校での論語出前講座、２市１町の小学校（３校）でのスポーツ出前講座、地域の子育てサロン「ママほっとサロン」と協働した水遊びイベントやスタンプラリーなどの本校文化祭の小学生来場企画、和気商工会と協働した特産品ブランド「和氣◎印」の商品販売などのグループがあった。

姉妹校との国際交流においては、6 月 10 日、韓国・沃川高等学校との交流では家庭科と現代文、7 月 22 日、韓国・昌原龍湖高等学校との交流では同じく家庭科と日本史の授業を一緒に受けた。日本史の授業はすべて英語で行われ、意見交換を取り入れながら日韓両国の歴史問題を考えさせられる内容となった。昼食時には２年次生閑谷學で「韓国との異文化交流」をテーマとしているグループが企画したおもてなしイベントを行った。1 月 20 日、台湾・屏東女子高級中學との交流は、台湾修学旅行に参加予定の１年次生が中国語で司会・進行を行った。その後は、スポーツ交流や日本食づくりを通して両校生徒が交流した。昼食後は韓国の２校と同じく旧閑谷学校を訪れ、本校のガイドボランティアの生徒の話を聞きながら本校の源流となる閑谷学校の歴史について学んでもらった。

エ　地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

校内のコア組織である企画委員会がコンソーシアムの下部組織である３つの部会と協働してカリキュラムの内容について立案し、校内組織の地域協働プロジェクト推進委員会で協議し、コンソーシアムで承認する形で実施した。

なお、２市１町の実務担当者と本校関係者とで構成される打合せ会「連絡会」を適宜開催する予定であったが、今年度は校内組織の企画委員会を隔週程度開催するにとどまった。

オ　学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

企画主任は、魅力化推進協議会（コンソーシアム）／学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の日程を展望しつつ、下部組織である小中高接続・産学官連携・高大接続の３部会から具体的な提案がなされるよう調整し、本研究開発を統括的に推進した。３部会主担当者及びカリキュラム開発

等専門家と協議し、地域と協働するためのカリキュラムの改善策をまとめるなど本研究開発を主導する役割と、カリキュラム開発等専門家や行政・企業・大学等の各主体等、外部との連絡・調整に当たる役割を果たすことができた。

３部会主担当者は、小中高接続・産学官連携・高大接続の各部会に所属するステークホルダーのメリットと本校のメリットを両方生み出せるよう部会を運営した。特に高大接続部会で７つのチカラの構造化を行ったことは成果であった。

研究主任は、学力向上推進の主担当として生徒の学習活動の改善を図るとともに、学力向上評価委員会においてその成果と課題をまとめた。全５回開催した学力向上評価委員会では、学力向上と進路保障とが有機的に結びついているか検証する場として、大学教員と本校教職員並びに本校生徒代表とが多角的に教育活動を評価した。

閑谷學・LHR 委員会は、カリキュラム開発等専門家や地域協働学習実施支援員も出席し、総合的な探究（学習）の時間と特別活動の企画・運営をしつつ、年次ごとの年間計画を管理しながら、各教科・科目以外の教育課程内の活動を連携し合って充実を図ることができた。

カ　カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の学校内における位置付けについて

カリキュラム開発等専門家は、週２日の非常勤雇用で、３部会の企画・運営や、校内組織「新カリキュラムを考える会」において外部の視点から学校や地域の特色を活かしたカリキュラムの策定支援に貢献した。また、「閑谷學」の授業計画立案、ワークショップやフィールドワーク等の地域連携企画、デュアルシステムにかかわる企業訪問等を行い、学校と地域・企業の橋渡しを行った。

地域協働学習実施支援員は、和気町の地域おこし協力隊であり、本校に支援職員として週４日勤務した。学年次団や進路指導課、部活動顧問などの校務分掌を担い、「閑谷學」の授業支援を中心的に行った。放課後は校内で公営塾を開き、学習機会の推進・支援を行った。

キ　学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

(ｱ) MSC 評価（生徒）

学力向上評価委員会の多面的評価の一つとして実施した MSC 評価とは、最もよくあらわれた変化の略で、学習の当事者である生徒が評価する場として、２学期に授業における「一番重要な変化」について全生徒対象で調査した。

(ｲ) ７つのチカラアンケート（生徒）

７月（全学年）と 12 月（３年次）・２月（１・２年次）に実施した。１年次は、７月に概ね数値が高く、傾向が見えにくいが、その中でも「自分を理解する力」「自立する力」に成長を窺える。２年次は、７月に落ち込んでいた「考える力」「行動する力」「コミュニケーション力」「自立する力」が概ね上がっており、また、「職業とつなぐ力」「チームワーク力」においてもインターンシップに関する項目など７月のデータを上回る結果となっている。３年次は、もともと高い数値であった「自分を理解する力」等も含め７つのチカラすべてが３年間で上昇するなど、本研究開発を通じた成長がみられ、閑谷學等の探究学習を通して、自らの進路について考え学びを深めたり、行動することから学ぶ姿勢が身に付いたりしたと考えられる。各年次でのデータの推移は、閑谷學の発表会後のものであり、多くの生徒が、この発表会を目標に、課題解決に向けて「自分」を、そして、「地域とのつながり」を意識できるようになっていったのではないかと思われる。

(ｳ) 学校評価アンケート（生徒、保護者、教員）

11 月 22～25 日に実施した。生徒は学校生活において「充実しているか」という問いに対し、８割以上が肯定的な評価をしている。生徒と保護者は、進路や適性に応じて多様な科目選択ができ、努力や姿勢等を含め多面的に評価する点を好意的に見た結果と考えている。

(ｴ) 多様な主体による協働会議の参加者アンケート

２月１日の探究学習発表会後、本校生徒 60 人（1 年次生 31、2 年次生 29）、生徒以外 87 人（市民 34、話題提供 14、講師 10、視察 29）が参加し、本校生徒から 10 テーマ、地域から 10 テーマの話題が提供され、高校生や地域住民が持つ具体的な構想を一歩前に進めるための場として開催した。以下は、参加者アンケートの一部である。

・いろいろな立場の方がフラットな関係で対話し、価値を創り出しつながっていく、素敵な経験をした。
・高校生のアイデアでも地域と関わることができることがわかった。
・どんな議題でも探究の仕方によって面白さは変わってくる。
・みんなで集まって話し合うと一つにつながっていくのがすごいなと思った。
・こんな場が町内に定期的にあったら、この町はもっともっと魅力にあふれることだろう。

ク　カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

コンソーシアムは、２市１町の首長など各主体において意思決定できる立場の委員が集まっており、第１回会議から本研究開発に係るカリキュラム開発を各主体が支援しやすい体制であった。特にコンソーシアム第２回会議（コミュニティ・スクール第１回会議）では、校内や部会で協議中であった新カリキュラムとそれを実現する人事について協議するなど、コミュニティ・スクール制度との相乗効果もあった。

各部会については、高大接続部会で７つのチカラの構造化が図れたことは、閑谷學の充実など、当初の想定を大きく超える成果であった。

ケ　運営指導委員会等、取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援について

今年度２回開催した運営指導委員会において、委員から次のような指導助言等をいただいた。

(ｱ) 第１回運営指導委員会（令和元年 10 月４日）

・デュアルシステムのカリキュラム開発は、コンソーシアムの組織である商工会だけでなく、意欲的な企業とも共に行うべき。
・県と市町村で実施している、高校生の地元就職対策の利用の提案。（事業所の受け入れ）
・地域で高校を盛り立てることが必要である。
・デュアルシステム等の授業で、体験後のリフレクションを行う能力を高めることが重要である。
・外に出て受け入れてもらうだけでなく、あるテーマについて調査・分析し提案することで、データリテラシーも高まり、地域を知ることができる。自転車で行けない範囲のことを考えるべき。
・学びにおいて、生徒自身がどの段階にいるかを理解し、体系的な学びにすることが必要。発表会も、何のために発表するかを考えていくことが大事である。
・グループ討論で大事なのは底上げをすることであり、その部分を徹底するべき。

(ｲ) 第２回運営指導委員会（令和２年２月６日）

・生徒の「人との距離感を大切にしたい」や「ご縁を感じている」との言葉から、成長を実感した。
・生徒のデータリテラシーを鍛えるためには、生徒がデータに触れる機会をたくさん設けて教師がアドバイスをしていくしかない。
・生徒が誤った方向に研究を進めないためにも、生徒と一緒に教師が悩むことが大切である。
・他校との生徒交流や総合評価も重要だが、一番影響が大きいのは教師からのフィードバックだ。
・閑谷學が学力に直結することが一番の理想だが、簡単にはいかないだろう。
・閑谷學を、教科学習と結びつけて欲しい。
・大学進学希望者に対して、大卒者を主な求人対象とする企業へのインターンシップを行うことで、大学卒業後に地元企業へ就職する可能性が広がるだろう。

・閑谷學を通して学んだことを、どうやってアウトカムするかが大切である。

コ　類型毎の趣旨に応じた取組について

校内組織「新カリキュラムを考える会」で、新学習指導要領施行を見据えつつ令和３年度入学生の新しい教育課程を検討した。生徒の学習意欲の維持が課題である現行の普通科文Ⅱ系の魅力づくりを中心に協議を行い、学校設定教科・科目「地域協働探究」を、地域の企業等で就業体験実習を行うデュアルシステムカリキュラムを取り入れた内容にすることとした。

また、キャリア探求科は３類型に分けて福祉系・流通系・会計系とし、流通系２年次のマーケティング３単位、商品開発３単位、電子商取引２単位を科目横断的授業として、地元企業と協働して地域の特産品を生かした商品開発を軸とする実践的な内容としている。

サ　成果の普及方法・実績について

前述のホームページでの実践報告のほか、今年度は、主に県外の学校訪問受け入れ 45 校（教育委員会、県議会含む）延べ 101 名、12 月の卒業探究発表会 77 名、２月の探究学習発表会 80 名の方が来校するなど、多くの方に本校の教育活動を直接公開している。また、近隣高校や全国の高校との探究学習交流会に延べ 11 回参加し、活動発表や意見交換等を行った。

８　目標の進捗状況、成果、評価

以下のとおり、本研究開発における今年度の目標を達成している項目が多く、進捗状況はおおむね良好である。

（１）＜本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）＞

ア　各教科・科目、総合的な探究の時間などにおける長期ルーブリックのレベル２以上の割合 29%（目標値 40%）「c」と相関をはかる。

イ　地元企業（３商工会、１商工会議所加盟）に魅力を感じ、就職する生徒の割合 59%（目標値 55%）就職者 32 名中 19 名が地元企業に就職した。

ウ　外部模試におけるＧＴＺのレベルＣ以上の割合 29%（目標値 34%）
１年次１月（年度最終）の進研模試と実力診断テスト

（２）＜地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）＞

ア　各教科における研究授業の実施回数３回（11/14、11/19、1/16）（目標値３回）
計 57 講座で延べ 75 名実施、全員授業見学

イ　各教科の授業シートのホームページへのアップ回数１回（目標値１回）

ウ　外部の研究会・発表会などへの参加回数 16 回（目標値４回）

・全国スクールリーダー育成研修会（京都大学）　8/17、8/18　教員７名参加
・全日本高等学校書道教育研究会岡山大会　11/14、11/15　教員１名参加
・高教研家庭部会家庭科教員研修会　8/20　教員２名参加
・岡山県商業教育研究大会　8/8　教員２名参加
・地域との協働による高等学校教育改革推進事業全国サミット (東京)　10/24　教員２名、カリキュラム開発等専門家１名、管理機関職員１名
・山陽学園大学地域マネジメントコンテスト 2019　7/20　生徒９名、教員２名参加
・全国高校生まちづくりサミット 2019（福井県鯖江市）　11/8～10　生徒４名、教員１名参加
・地域と連携した『高校の魅力化』フォーラム（岡山大学）　11/14　生徒４名、教員１名、カリキュラム開発等専門家２名、地域協働学習実施支援員１名参加
・高校生キャリア教育フェア 2019（コンベックス）　11/24　生徒４名、教員１名参加
・第５回高校生による岡山の歴史・文化研究フォーラム　12/15　生徒４名、教員１名参加
・ユネスコスクール実践報告会　11/17　生徒６名、教員３名参加
・ESD　café　URA　2019（国際交流センター）　12/22　生徒８名、教員１名参加
・佐伯中学校だっぴ　10/19　生徒 13 名、教員２名参加
・2019 高校生地域創造サミット（三重県）　12/26、12/27　生徒３名、教員１名、カリキュラム開発等専門家１名参加
・グローカルリーダーズ summit in 飯野高（宮崎県）　1/11、1/12　生徒３名、教員１名参加
・第６回 SCH シンポジウム（山形県）　2/23、2/24　生徒３名、教員１名、カリキュラム開発等専門家１名参加

（３）＜地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）＞

ア　本研究開発に参加する外部人材の参加延べ人数 267 名（目標値 93 名）

１年次閑谷學 25 名、２年次閑谷學 40 名、卒業探究発表会 77 名、探究学習発表会 80 名、コンソーシアム関係 45 名

イ　魅力化推進協議会の開催回数２回（目標値２回）

※２月 28 日実施予定第２回学校運営協議会は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止。

ウ　就業体験実習の受け入れを希望する地域の事業所数 45 事業所（目標値 40 事業所）

３日間受け入れ可能事業所数 31 事業所、５日間受け入れ可能事業所数 14 事業所

＜添付資料＞目標設定シート

9　次年度以降の課題及び改善点

（1）コンソーシアム及び各部会

年３回の親会議と３部会を引き続き行う。連絡会は本校企画委員会を核とした、２市１町の実務担当者と本校関係者の定期的な会議となるよう充実を図る。近隣高等学校と連絡協議会を立ち上げ、探究学習を中心とした地域協働のすそ野を広げる。

（2）各教科・科目

教科横断的な課題の研究については、本校の総合的な探究（学習）の時間「閑谷學」において生徒が探究を進めていくにあたり、複数教科の教員から指導を受けた生徒事例もいくらかはみられるが、意図的・計画的な実践までには至っていない。長期ルーブリックは、本校が育てたい生徒像がより具体化できる本校独自の長期ルーブリックの作成を目指すことが必要であり、作成したルーブリックをどう活用していくかについても、工夫が必要である。

令和３年度から始まる学校設定教科・科目「地域協働探究」の中身を検討し、長期就業体験実習を実施する時期・事業所・体験内容を具体化し、時間割や教科担当者についてシミュレーションすることが必要となる。今年度同様に２年次生就職希望者全員が、短期（夏期に３日間）のインターンシップまたは長期（夏期・冬期・春期に５日間ずつ）の就業体験実習を行う。次年度からは、長期（５日間）の就業体験実習は「学校外における学修」として各１単位を認定する。評価方法を検証しコンソーシアムの承認を得る。

（3）閑谷學

前年度の取組の評価検証をもとに改善する。２市１町のフィールドを生かした広域での探究活動が活発でない。調査に行く手段等が課題となることが考えられるが、広い視野を持たせるために次年度は備前市・赤磐市にもフィールドワークに積極的に行かせたい。また、一部、行動に移せていない（自分ごとにできていない）生徒がいるため、計画立案の段階で行動の確認をして早期に実践するよう促す必要がある。

１年次は前半に探究の手法等を行うため、後半の探究活動の時間の確保が難しく、２月の発表会に間に合わせるとなると深まりが少ない。２年次は 10 月の修学旅行をはさむため、通常の探究活動が一時中断されてしまう。３年次は進路決定に向けて１学期の間に探究活動を終えておくことが望ましい。以上のことから、現在の年次ごとの探究活動を、今後、年次をまたいだ活動に変更することを検討する。また、縦のつながりが弱いため、先輩の探究を引き継ぐことができるように、ゼミを全学年統一してゼミの先輩が後輩へ指導をする場面を作り、地域にとって持続性があり生徒にとっても年々深まりが出る探究活動をさせたい。

【担当者】

担当課	岡山県教育庁高校教育課	ＴＥＬ	086-226-7578
氏　名	神田　慶太	ＦＡＸ	086-224-2535
職　名	主任	e-mail	kanri-koukou@pref.okayama.lg.jp